

いる。『和名抄』に丹波国多紀郡草上郷がみえ、高山寺本では「久左乃加三」の訓を付している。兵庫県多紀郡篠山町に、篠山川に沿って草ノ上の集落があり、すぐ上流域に名神大社の櫛石憲神社が鎮座している。

(2)は上端部のみが残っており、表面には鉄粉のような錆が付着している。木簡が廃棄され、土中に堆積していた際に付いたものだろう。貢進物付札ではなく、白糸につけられた荷札の断片と思われる。(1)は評制が施行されていた時期の貢進物付札であるが、なぜ藤原京域から南へ遠く離れた場所（藤原京の南京極大路である阿倍・山田道から、南へほぼ一・一km隔っている）から出土したのか、問題を残している。周辺地域の発掘調査を俟って判断すべきではあるが、遺跡のすぐ西方に菖蒲池古墳があり、またすぐ南に天武陵を望む事実に留意すべきかと思われる。菖蒲池古墳の年代については大きく意見が分れているが、大内陵よりは古くなるようである。朱鳥元年（六八六）九月に崩御した天武天皇は持統二年（六八八）十一月に大内陵に埋葬されるが、大内陵の造営は持統六年六月ごろまで継続した。臆測にすぎないが、ここでは木簡出土地の周辺に大内陵造営のための施設が存在した可能性を指摘しておきたい。

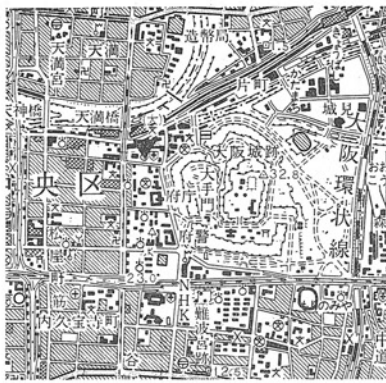
9 関係文献

白石太一郎・前園実知雄「明日香養護学校校庭出土の木簡」（『橿原考古学研究所彙報』『青陵』二二号 一九七三年）（和田 萃）

大阪・大坂城跡 (1)

- 1 所在地 大阪市中央区大手前一丁目
- 2 調査期間 一九五三年（昭28）一〇月（終了年月不明）
- 3 発掘機関 大阪市立大学大阪城址研究会
- 4 調査担当者 山根徳太郎
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 安土桃山時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大阪合同庁舎第一号館の基礎掘削時に調査が行なわれている。木簡は現在行方がわからないので、山根徳太郎氏の報告（大阪市立大学



（大阪東北部）

大阪城址研究会『大阪城の研究』研究豫察報告第三 一九五四年）によって記述する。庁舎西半部の地表下八〜一〇mの所に窪地があり、下層から植物包含層、奈良時代の遺物（祝部土器）包含層、窪地埋土層がみられた。窪地埋土層からは漆椀、宋銭

「政和通宝」、明代の制作と思える染付の鉢片、金箔押瓦片とともに木簡が一点出土している。山根氏は窪地について、幅四〇五〇mm程もある南北方向の旧河道があって、豊臣秀吉による大坂城構築時に完全に埋ったものと考えておられる。

当該地は豊臣氏大坂城期、慶長三〇四年（一五九八）に三の丸にとりこまれた地域である。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「(大) 一□□斗

石蔵五右衛門尉
川次郎右衛門尉

・「日向納 □□□

右衛門尉

木簡は「幅一寸長さ五寸ばかり」の大きさで、「米俵にでもさし

込んだえ、ふのようなもの」と考えるが、読み得る人名の最下に、何々右衛門尉と読めるのであり、その書体から見て、まづは秀吉在世当時のもものと推定せられるのである。」と釈文と所見が述べられている。荷札・付札の木簡で、形は頭部の切り込みについては判然としないが、下端は尖っていたのであろうか。

近接する豊臣期大坂城三の丸跡で出土した木簡について佐久間貴士氏は、荷札・付札には屋号、品名、数量、人名が書かれていて、人名は基本的には差出人であるといわれる。(大)は屋号、一□□斗

は数量、石蔵某・□川某は差出人であろうか。別の面は受取人、品名、差出人が書かれていると推測することもできる。

この木簡は大坂城跡から出土した最初のものである。最近の調査からみても豊臣氏大坂城期としてほぼ間違いないと思われるが、今後の周辺の調査や木簡の資料が増えていくことによって、内容や年代がより確かなものになっていくだろう。

9 関係文献

榮原永遠男「現大阪城周辺出土の木簡」(追手門学院校地学術調査委員会『大坂城三の丸跡』一九八二年)

佐久間貴士「大阪・大坂城跡」『木簡研究』一一一九八九年)

(八木久栄)